



季刊

弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第36号

(2020年1月)



★ギャラリー展

「出雲の赤 古墳時代編」
好評開催中〜2月24日(月・振休)

2019年夏に当館で開催した、「出雲の赤―縄文・弥生時代―」では、当時の埋葬儀礼において水銀朱が重要なアイテムだったことを紹介しました。「赤」という色に、古代の人は強いパワーを感じていたのです。今回は、古墳時代にスポットライトを当て、墓や集落で出土した「赤」を展示し、古代出雲人の思いに迫ります。

弥生時代に続き古墳時代になっても、墓からは鉄を主成分とするベンガラや、硫化水銀からなる水銀朱(辰砂)が確認されます。これらの赤色顔料は、死者の遺体に撒かれたり、土器などの容器に納められ、あるいは塊のまま死者に供えられたりしました。



赤い人骨(出雲市神門地区出土)

松江市袋尻3号横穴墓(6世紀)

からは「赤い人骨」が出土しています。埋葬時に遺体の上から赤色顔料(ここではベンガラ)が撒かれ、皮膚や筋肉などの軟部組織は腐り、腐らない赤色顔料が骨に付着したのです。「赤い人骨」は、島根県内で16例確認されています。出雲市内では墓からの出土例は未確認ですが、神門地区から出土したと伝えられている赤い人骨も、古墳が横穴墓に埋葬されたものと推測しています。

赤色顔料が土器の内面に付着した事例もあります。これは、死者に赤色顔料そのものを供えたものでしょう。死者の魂を鎮めるため、「赤」を撒いたり、供えたりしたのです。

また、出雲ならではの赤い副葬



内面が赤い須恵器
(出雲市朝山町祝廻横穴墓)

品もあります。それは、赤メノウ製の勾玉です。赤メノウは、松江市玉湯町の花仙山から産出され、近くの玉作工房で勾玉に加工されました。この赤い勾玉は、碧玉製の管玉や青いガラス玉などと連なっており、装着されると、ひときわ目立ちます。ヒスイ製の勾玉を重視する畿内王権の玉飾り構成とは色合いが異なり、まさしく「出雲の赤」にふさわしい一品です。

そのほか展示では、集落で出土する赤も紹介しています。ぜひこの機会に古墳時代の「出雲の赤」をご覧ください。

また、2月11日(火・祝)には、関連講演会を開催します。詳しくは4頁の「講座・講演会のご案内」を参照してください。

(坂本豊治)

「出雲の赤」よすみちゃん現る!



展示室にいるよー!
会いに来てね♪

★ミニ企画展

「出雲の縄文文化と交流

—京田遺跡をひも解く—

好評開催中！1月27日(月)

出雲の縄文文化―。これまで謎に包まれていましたが、京田遺跡(出雲市湖陵町常楽寺)の発掘調査で明らかになってきました。

そのなかで注目したのは、縄文時代にも多様な交流のネットワークが存在していたことです。特殊な異形土器の表面に塗られた水銀朱は、北海道産と推定されていますが、その水銀朱は磨石や粗製土器内面にも確認できました。朱の原材料を持ち込んで加工し、土器に入れて異形土器を彩色した当時の姿が鮮やかに想像できます。

展示では出雲の縄文文化を京田遺跡からひも解きます。ぜひご覧ください。(幡中光輔)



ふしぎな形の土器があるよ!

★ギャラリー展

「田儀櫻井家のたたら製鉄」

2月26日(水)～5月25日(月)

木炭の火力で砂鉄を溶かし、鉄を作り出す「たたら製鉄」。

出雲市多伎町奥田儀の宮本地区を本拠地とした田儀櫻井家は、幕末には出雲国内で一、二を争う生産量を誇り繁栄しました。

田儀櫻井家が営んだ「たたら場」の様子は、文献史料や発掘調査により明らかになっており、住居跡などが残る宮本鍛冶山内遺跡や、田儀港に近い越堂たたら跡、山間部の朝日たたら跡や聖谷たたら跡が国の史跡に指定されています。今回の展示では、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の価値と見どころをご紹介します。(石橋 紘二)



宮本鍛冶山内遺跡

★古文書の森をゆく①

「何だいま昔の字が書いてあーが、全然分かんせんわ」。こうした声が市民の方から度々寄せられます。たしかに、昔の字(くずし字)で書かれた古文書はとても難解ですが、しかし、丁寧にひも解くと豊かな歴史が見えてくるのが、古文書の醍醐味なのです。

市文化財課では発掘調査だけでなく、古文書の調査も行っています。そこで今号から、古文書を通して出雲市の歴史を考えるコーナーをシリーズで掲載します。

「江戸と出雲をつなぐあきんど」

日本海に面した出雲市域。かつては風まかせの和船を用いた商売が盛んで、多くの従事者がいました。口田儀村(現多伎町口田儀)に居住した油屋もその一人。幕末から明治初期にかけて活動し、主に日本海沿岸から大坂方面で商売をしていました。

下の写真は油屋に伝わる古文書で、幕末頃に作られた薬(登龍丸)の効能書です。これによると、薬は痰・咳・胸やけに効くようです。面白いのは売り文句。気管支系の症状もカバーする万能薬を批判し、その症状に特化した登龍丸こ

そ「天下無双」の薬だといわれています。薬の流通状況を逆にとった、したたかな宣伝戦略といえます。

また、効能書の末尾には薬の販売元である江戸下谷(現上野駅近く)の本屋・青雲堂と、販売取次店を兼ねる本屋が二十一軒も列挙されています。北は松前から南は土佐まで、各地に取次店があったことが分かります。注目すべきは、出雲に取次店がなく、油屋の商売圏内に位置する新潟・鳥取・大坂には取次店が存在することです。

つまり、本屋のネットワークと油屋の商売圏が重なった結果、江戸の登龍丸が出雲にたどり着いたのではないのでしょうか。(中山玄貴)



登龍丸の効能書

★速報展

「1/80の調査」
—史跡鰐淵寺境内の調査から—

2月5日(水)～6月1日(月)

出雲市文化財課では、国史跡・鰐淵寺境内の発掘調査を行っています。

調査は、境内の3箇所を実施していますが、そのうちの1箇所、本覚坊跡の成果を紹介します。

本覚坊は、最大80余坊あったとされる鰐淵寺の諸堂の中でも、もっとも古い僧坊(寺に付属する僧の家屋)の一つと考えられています。史料によれば、1165(永万元)年には、本覚坊の名が見えることから、平安時代後半から存在していた可能性があります。それでは、いつまで坊として機能していたのでしょうか。はっきりとは断定できませんが、明治時代までは存在していたと思われる。

この700年あまりの本覚坊の歴史を、発掘調査で見つかった建物遺構と出土品から、たどってみたいと思います。

(原 俊二)



鰐淵寺境内の歴史に迫る!

★速報展

「仁」県内初例の刻書文字
—高西遺跡の調査から—

好評開催中～2月3日(月)

出土した8世紀前半の須恵器には「仁」の文字が刻まれていました。

今回の展示では、この文字から塩冶地域の歴史を考えます。

(江角 健)



「仁」と刻まれた須恵器

★春季企画展

「日本書紀」1300年記念
硯から見た古代の出雲

3月7日(土)～5月18日(月)

神話や古代の歴史が記される『日本書紀』は720(養老4)年に完成しました。今年、完成後、1300年目の節目の年です。

今回の展示では、『日本書紀』作成時の出雲の様相を考えます。特に「硯」に焦点をあて、古代の出雲の人びとと文字の関係に注目します。また、3月14日(土)には、関連講演会を開催します。詳しくは4頁の「講座・講演会のご案内」を参照してください。(高橋 周)

★体験コーナーのご紹介

楽しく学べるコーナーが盛りだくさん。すべて無料です♪

「くみたてよう!」

2階には、バラバラの破片を組み立ててできた本物の土器も展示しているよ。探してみてね。



土器パズル

「きてみよう!」

古代の人は、どんな服を着ていたのかな?



古代衣装の試着コーナー

「ほってみよう!」

いろいろなお宝が埋まっているよ。



発掘プール

みつけた!



「ならしてみよう!」

どんな音がするかな?



銅鐸



土笛

★展示のご案内

▼ミニ企画展

好評開催中〜1月27日(月)

「出雲の縄文文化と交流」

―京田遺跡をひも解く―

●ギャラリートーク

1月18日(土)10時〜

▼ギャラリートーク

好評開催中〜2月24日(月・振休)

「出雲の赤 古墳時代編」

●ギャラリートーク

1月25日(土)10時〜

▼速報展

好評開催中〜2月3日(月)

「仁」県内初例の刻書文字

―高西遺跡の調査から―

※観覧料、参加料ともに無料です。

★講座・講演会のご案内

▼ギャラリートーク展関連講演会

2月11日(火・祝) 14時〜16時

「古墳時代の赤色顔料」

●講師 志賀智史氏

(九州国立博物館)

●受講料 無料

▼春季企画展関連講演会

3月14日(土) 14時〜16時

「フ世紀の地方社会と出雲」

●講師 鐘江宏之氏

(学習院大学教授)

●受講料 無料

▼館長講座

1月25日(土) 14時〜16時

「須重器から山陰の歴史をひも解く」

●講師 花谷 浩

●受講料 300円

▼文化財保護審議会委員講座

【第1回】

2月22日(土) 14時〜16時

「杵築富くじ興行とその経済効果」

●講師 山崎裕二氏

(公益財団法人いづも財団 事務局長)

【第2回】

2月29日(土) 14時〜16時

「出雲の神像―その信仰と造形」

●講師 的野克之氏

(高根県立古代出雲歴史博物館 参与)

【第3回】

3月7日(土) 14時〜16時

「神門通りの形成と出雲大社の神苑拡張計画(大社の近代化と近代的な神社景観の形成)」

●講師 和田嘉宥氏

(米子工業高等専門学校 名誉教授)

●受講料 各回300円

※受講には、事前申込みが必要です。電話・FAXでお申込みください。

★館長古采叢

去年、瀧澤美奈子著『150年前の科学誌「NATURE」には何が書かれていたのか』という書籍が出た。1869年に創刊された英国の週刊科学雑誌『ネーチャー』についての本だ。

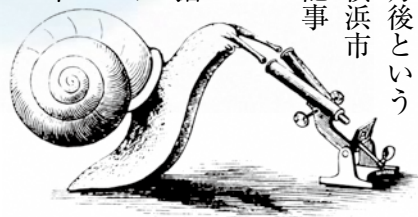
瀧澤さんによると、創刊からわずか7週目の12月16日号には、『The Japanese』なる記事が掲載された。著者は、ジェーン・アグネス・チェッサー、という女性教育者。彼女に来日経験はないものの、スイス人外交官エメ・アンペールの在日体験記録『図解 日本と日本人』を参考に執筆したらしい。彼女は次のように記す。

「アンペール氏が考えるに、日本人の起源は多様である。おそらく中国から来た者もあれば、近隣の韓国やモンゴルからの者もいた。はるか南方のマレーシア諸島から小舟に乗って日本にたどりついた先祖がいたのも間違いあるまい。」

一人の英国女性が、背は高くはなく脚も短いけれど、小さな美しい手もち、ヨーロッパ人よりも印象的な目の色をした日本人(彼女曰く)、そのルーツに思いをめぐらせていたことに驚く。

『ネーチャー』には、発見からわずか5か月後というスピードで横浜市大森貝塚の記事も載った。

エドワード・モースが発掘開始5日後に書いた記事、という。日本考古学最初の発掘成果は、英国から情報発信されていた。陸貝研究者のモースが欧米での貝塚遺跡の存在を熟知していたのも博物学の時代ならではのことが、学際研究の大切さも示しているように思える。



モースが発掘開始5日後に書いた記事、という。日本考古学最初の発掘成果は、英国から情報発信されていた。陸貝研究者のモースが欧米での貝塚遺跡の存在を熟知していたのも博物学の時代ならではのことが、学際研究の大切さも示しているように思える。

(花谷 浩)

(発行) 出雲弥生の森博物館

2020年1月

〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.lg.jp
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

- 入館料/無料
- 開館時間/9:00~17:00 (入館は16:30まで)
- 休館日/火曜日 (祝日の場合は翌平日) 年末年始

